



## 選択の視点 (選択説明会特集 その2)

自由選択科目の説明では、例えば地歴の中で日本史を選択すると、結果として高い現役進学率になっているといった情報も君たちには役だったかも知れないが(ちなみに、日本史選択者は、地理などに比べて少人数であることも考慮に入れること)、私は理科の科目について分かりやすく解説したK林先生の話が印象に残った。というのも、選択説明会では、どうしても進路、さらに言えば具体的な入試がイメージされるために、入試科目という観点から科目選択を考えがちになってしまうし、それはそれで仕方ないことではあるのだが、K林先生は「ここは予備校ではない。学校としては、君たちが大学に進学した後の学力を保障することも大切な授業の目標になる。だから、理系に進学する人は、大学に入った後の勉強のことも考えて、二科目選択しなさい。」と話してくれたわけで、私もまさしくその通りだと思うからである。

この学年の担任をやる前、私は日比谷の入試の仕事をしていた(今は進路部で日比谷からの「出口」の仕事をしているわけだが、その前は日比谷への「入口」の仕事をしていたというわけ...)。その時、日比谷の学校説明会などで自校入試について説明したりしていたのだが、その際私が受検生諸君に伝えていたのは、「自校入試は難しいかも知れないが、それは「それだけの学力を身につけて日比谷に入学してほしい」「日比谷に入った後の授業についていくためには、それくらいの基礎知識がないと大変だよ」という、我々のメッセージであり、だからこそ、丁寧に過去問を解いて入試に臨んでほしい。君たちにとって

自校入試は「高校に入るためのもの」としてイメージされるだろうが、「高校に入ってから学習の準備」、さらには「その先に控えている進路を開拓するための基礎作業」という風に広く捉えて、自分を高めるために頑張ってもらいたい」ということであった。

K林先生がおっしゃったことも同じことである。目標を高く持ち、その目標を実現するために努力することは、結果として第一志望への進学がかなわなくても、必ずその後の君たちの成長へと結びつくのである。そのことを忘れずに、安易な逃げの選択をするのではなく、自分を高める選択を心がけよう。

\*

さて、具体的な選択に入ると、限られた時間で何を選択したらよいか迷うだろう。考え方としては「自分でやれるかどうか」ということも一つのポイントとなる。例えば理系古典(2単位)だが、自分でも問題集を計画的にこなせそうだというのなら、選択しないということもある(代わりに4単位地理を選択)。しかし、選択しておかないと、自分では古典など勉強しないと思われる人は選択した方がよい。選択すれば、イヤでも毎週古文・漢文を解くことになるからである。後期になっていよいよ本番が近づくと、理系の諸君は古典などに手を出す余裕がなくなってくる。選択していれば、リズムを崩すことなく学習が継続できることになるのである。

理系の人々の社会や古典、文型の人々の理科や数学は、自分の性格を考え合わせながら、こんな視点からも選択するかどうかを考えてみるとイイと思う。